

青木ヶ原と写真をめぐる場所

東京芸術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

大槻唯我

要旨

本論は一般に「風景写真」として分類される写真の中でも、撮影された土地の歴史や風土、文化、そしてそこで起きた出来事といった表層からは察知し得ない〈場所〉を撮る写真作品の考察と実践である。本論における〈場所〉は、マルク・オジェ (Marc Augé, 1935-) の「アイデンティティを構築し、関係を結び、歴史をそなえるもの」という説と、エドワード・レルフ (Edward Relph, 1944-) の「抽象的な物や概念ではなく、生きられる世界の直接に経験された現象であり、個人的なまたは社会的に共有されたアイデンティティの重要な源泉であり、多くの場合、人々が深く感情的かつ心理的に結びついている人間存在の根源」であるという論説に基づいて定義する。

写真家にとって、写真作品とは「制作」と「プレゼンテーション」を包含する。写真は視覚芸術の一部ではあるものの、制作過程におけるリサーチや、写真を撮りに出かけるといった身体的行為に付随する五感での〈場所〉の知覚を含み、動的な経験といえるものである。

〈場所〉という点から世界を捉える時、目に見えるものの背後にあるものへ思考を広げ、物事の捉え方を変えるというあり方は、場所の認識だけでなく、私たちの日常、そして自殺という問題に向き合う上でも重要である。本論は研究作品『泉の果て』の撮影地である青木ヶ原を舞台に、近代以降人の手によって作り上げられた自殺の名所を、〈場所〉の観点から捉えなおすことで、この半世紀ほどの間に定着してしまったイメージとは異なる「青木ヶ原」という土地を提示し、死から生への転換を促すことを試みる。写真における〈場所〉の知覚と表現を通して、写真作品の可能性を探求し、写真が世界の見方を定義するものではなく、世界の認識を拓ける可能性を持つ、見る方法なのである。